

漱石の思い出 年表

明治 29 年 (1896) 6 月 9 日、夏目漱石は鏡子さんと結婚式を挙げました。結婚式の会場は、熊本市下通町（通称・光琳寺町）にある漱石の自宅離れの 6 畳間でした。賑やかな披露宴などもない、ささやかな結婚式だった。

明治 32 年 (1899) 5 月 31 日、漱石と鏡子さんとの間に待望の第一子の女の子が誕生しました。以前に流産を経験していた漱石夫妻にとって、無事に新しい命の誕生を迎えられた感慨はひとしおでした。

明治 34 年 (1901) 5 月 2 日、英国留学中の漱石の元に、日本に残してきた鏡子さんから手紙が届きました。同封されていた妻子の写真を見て、思わず筆を執った漱石先生でした。

大のおしゃれだった漱石先生は、鏡子さんの着物にまで口を出すことがあったそうです。あまりのこだわりぶりに、鏡子さんもうんざりさせられこともあったそうで……。

明治 42 年 (1909) 4 月 21 日の深夜 2 時頃、「胸が苦しい」と訴える鏡子さんを介抱する夫・漱石。具合はなかなか落ち着かず、意を決した漱石先生は、鏡子さんのために深夜の街に飛び出しました。

明治 43 年 (1910) 8 月 20 日、43 歳の漱石は伊豆・修善寺の菊屋旅館の一室で横になっていました。胃潰瘍の入院治療のあと、転地療養のためこの地に来ていたのです。別室で医者に詰め寄る鏡子さんの口調は、いつにない厳しいものでしたが、果たしてその理由は？

明治 44 年 (1911) 3 月 16 日の夕刻、夏目家を訪ねてきたひとりの青年を前に、夏目夫婦の他愛のない、しかし和やかな会話が交わされました。漱石山房の平穏な一日が感じられるエピソードです。

大正 4 年 (1915) 3 月 19 日、数え 49 歳の漱石は、東京駅から汽車に乗って京都旅行に出かけました。実はこの旅行、鏡子夫人の「ある計らい」が発端になっていたのです。

大正 4 年 (1915) 4 月 2 日、旅先の京都で倒れた漱石先生。東京から鏡子夫人を呼び寄せますが、せっかく来てくれた鏡子さんのある一言で、急にむくれてしまったそうです。その言葉とは？。